

293 子宮頸部上皮内腫瘍に対する各種レーザー療法後の遠隔治療成績

北里大学医学部

脇田邦夫, 蔵本博行, 佐々木紀充, 釘持 稔,
鈴木 真, 新井正夫

〔目的〕子宮頸部上皮内腫瘍及び微小浸潤癌疑性に対し、保存療法としての各種レーザー療法を行い、有用性について検討した。〔方法〕診断が確実な上皮内腫瘍には、外来診療室で各種レーザー蒸散法(YAG, CO₂, YAG/CO₂)を行った。診断の不確実、または浸潤が疑われるものには診断と治療を兼ねた方法として独自に開発したYAGレーザー円錐切除法とした。〔成績〕対象は治療後6カ月以上を経過したものとし、蒸散で、異形成187例(軽度; 25, 中等度; 77, 高度; 85)と上皮内癌42例, 計229例, 円錐切除法で、同様に17例(3, 3, 11), 10例, さらに微小浸潤癌疑性18例, 計45例, 総計274例である。蒸散法の初回治療成績は、異形成で92.5%, 上皮内癌92.9%, 経時的成績は、上皮化が安定する10週では異形成186例中93.5%, 上皮内癌42例中92.9%, 1年ではそれぞれ156例中98.7%, 33例中100%であった。3年(67例, 7例), 5年(17例, 2例)では100%と良好である。レーザー機種間で有意差は認めず、また初回遺残17例は再蒸散等で治癒した。円切法後の組織検索による術前・術後の正診率は82.2%で、内9例に浸潤(Ia; 8, Ib; 1)を確認し、浸潤例には追加開腹手術を行った。また、初回治療成績及び経時的治療成績(10週; 45例, 1年; 33例, 3年; 9例)とも100%と極めて優秀である。副作用は両者とも軽微である。〔結論〕レーザー蒸散法に加え、独自の円切法の導入により、本法の応用範囲は広まり、さらには長期観察による良好な治療成績から確立された保存療法と思われる。

294 多のう胞性卵巣に対する卵巣くさび状切除術と腹腔鏡下卵巣 Multiple Punch Resectionの効果について

九州大学生体防御医学研究所

宇津宮隆史, 角沖久夫, 是永 進,

〔目的〕多のう胞性卵巣(PCO)に対するくさび状切除術(WR)と新しく開発した腹腔鏡下卵巣 Multiple Punch Resection (MPR)の治療効果の比較を行い、MPRの有用性を検討する。またWRやMPRの奏効機序を血中ホルモン値の動態により検討する。〔方法〕当科不妊外来を訪れた無排卵周期症から第1度無月経症の62例で、そのうち50例に従来の方法であるWRを、12例にMPRを行った。MPRは腹腔鏡下にそれぞれの卵巣に5~8ヵ所Punchingを行った。また術前、術後にわたり可及的連日採血を行い、血中LH, FSH, Testosterone (T)の測定を行った。〔成績〕術後自然排卵が認められたのはWR群50例中24例48%, MPR群12例中10例83%であった。また、妊娠に成功したのはWR群50例中26例52%, MPR群12例中4例33%であった。連日採血を行った結果、WR群はTが術後1日目から4日目にかけて急激に減少し、その後、徐々にもとにもどった。LH, FSHは著明な変化はなかった。MPR群ではT, LH, FSHともに有意の変動は認められなかった。〔結論〕PCOに対しては、従来行われているWRと同様、新しく開発した腹腔鏡下MPRの治療成績は、術後排卵率、妊娠率ともに優れていた。開腹による癒着や入院期間、再手術の可能性等を考えるとMPRはPCOの治療としてWR以上に有用であると思われる。またその奏効機序はWRとは異なることが血中ホルモン値の動態により推測された。